

～VTS 関西ミーティング 実施報告書～

日時：7月22日(日) 13:30～17:00

会場：数寄和太津 <http://sukiwa.net/otsu/>

- 内容： 1. 参加者の近況報告  
2. 立体作品・詩を用いた対話型鑑賞  
3. 対話型鑑賞に関連した自由なディスカッション

参加者：VTS セミナー受講者 8名



～実施報告～

1. はじめに

VTS 関西ミーティングは2011年3月から2012年3月にかけて開催された連続セミナー「ヴィジュアル・シンキング・ストラテジー(VTS)」の修了者を中心とした交流の場である。アート関係者のみならず、教育関係者、企業関係者など、分野問わず様々なメンバーが集まった。初回は参加者をセミナー修了者に限定したが、将来的には対話型鑑賞に興味関心のある方であれば誰でも自由に参加できる開かれた場にしたいと考えている。

当日は参加者間でかなり開かれた意見交換が行われた。本報告書では、公開できる範囲内で当日の意見交換の内容をまとめている。

2. 参加者の近況報告より

アート関係者

美術館勤務の参加者は、来館者に対する鑑賞プログラムとして、鑑賞ボランティアに対する

研修のコンテンツとして、また館外の学校からの依頼に対する鑑賞プログラムとして対話型鑑賞を活用している。また、ギャラリー勤務者は展覧会の関連イベントとして対話型鑑賞を活用している。

#### 企業関係者

自身が勤務する企業の研修プログラムとして活用することを検討しているメンバー、携わっている企画業務において思考を整理するためのツールとして対話型鑑賞のエッセンスを活用しているメンバー、社内ミーティングを円滑に進めるために対話型鑑賞のエッセンスを活用しているメンバーなど、鑑賞プログラムとしてではなく、主に問題解決や人材開発の手法として対話型鑑賞を活用している。

#### 教育関係者

対話型鑑賞を美術作品ではなく詩などの文学作品を用いて、国語の教科教育に活用することを検討している。

### 3. 立体作品・詩を用いた対話型鑑賞より

会場である数寄和太津に展示されていた立体作品の鑑賞、そしてメンバーの希望により詩を用いた鑑賞を行った。立体作品、詩ともにメンバー同士の活発なディスカッションが起こり、美術作品以外を鑑賞の対象として用いることも可能であることを再認識した。特に詩を用いた鑑賞では「文章の中に深く入り込んでいくような感覚があった」「他の人の意見をきくと思わず自分の意見を言いたくなった」といった感想が出るなど、対話型鑑賞を用いることの有効性を強く感じる事ができた。

### 4. 対話型鑑賞に関連した自由なディスカッションより

#### 対話型鑑賞の作品選びについて

各人の近況報告で、同じ作品でも鑑賞者によってディスカッションの展開がまったく異なること、鑑賞者に適した作品を選ぶことで広く深いディスカッションが行われることが報告され、作品選びの重要性を再認識した。

意見交換の中で、日本人は物語に惹かれる傾向にあるという認識がメンバー間で共有され、描かれている人物やモノから物語を紡ぎやすいことに加え、作品の中に鑑賞者と同じ年代の人物が描かれているなど、鑑賞者が作品と自分自身を重ねやすい要素が含まれていることがポイントではないかという仮説が導き出された。

また、作品選びにおいては「鑑賞者に適した」という基準をしっかりと理解しておかねばならないという意見が出た。「自分の好きな作品をみてほしい」「作品を通じてこんなことを感じてほしい」「鑑賞者のことはわかっているからこの作品でも大丈夫」といった自分主体の作品選びをしてしまうと、鑑賞者に適した作品を選べない可能性が高くなってしまふ、そしてこれは作

品について知っている、鑑賞者のことを知っているという想いが強い人間こそ陥りやすいため、相手のことをどれだけ想像できるか、常に心に留めて判断しなければならない、とのことだった。

#### 鑑賞者から否定的な意見が出た場合の対応について

対話型鑑賞という言葉の認知度の低さから、美術館やギャラリーで実施した際に「これは一体何をやっているの?」「人前で意見なんて言いたくない!」といった参加を拒否する反応を示す鑑賞者も出てくることがある。メンバーの一人から、そういった鑑賞者にナビゲーターとしてどのように振る舞うべきかという問いが投げかけられた。

意見交換の中では、内容を理解していない鑑賞者には対話型鑑賞とは何か理解していただく、意見を言いたくない鑑賞者には他者の意見をきいているだけでも良いことを伝えるなど、あくまでもその鑑賞者の意見を尊重し、無理に参加してもらう必要はないといった意見が出た。ちなみにメンバーの体験談として、始めは参加を拒否していた鑑賞者が最後には最も積極的に意見を発言していた、といった事例も出された。

#### 対話型鑑賞の日常への応用について

スキル、マインドの二つの観点で対話型鑑賞がもたらす日常への影響について意見交換が行われた。

まずスキル面は主に企業関係者の社内業務や会議の場において。あるメンバーからは、自分が立案した企画に対するフィードバックを分析する際、フィードバックの表面だけではなくフィードバック者の意図や意見の背景まで含めて把握、整理することで賛同の意見も反対の意見も、それぞれ企画の改善に直結するように活用できるようになったという事例が紹介された。

また別のメンバーからは、会議が停滞した際、全員が抱えているモヤモヤではなく、一人ひとりのモヤモヤを丁寧に解消しようと働きかけることで会議全体の雰囲気はほぐれ、結果的に全員が意見交換する場が生まれ、全体のモヤモヤも解消されるという事例が報告された。これらは「鑑賞者の意見を言葉だけでなくその背景まで含めて把握する」「鑑賞者一人ひとりの意見を積み重ねていくことで鑑賞がより豊かになる」という、ナビゲーター経験を積んだことで身についた思考パターンがもたらした効果ではないかという意見が出た。

続いてマインド面は日常のあらゆるシーンにおいて。対話型鑑賞では、同じ一つの作品をみながら多様な意見を交換することで、作品の解釈が拡がり深まる。つまり同じ意見でも反対意見でも、全て発言することでより豊かな場を生み出すことになる。「対話 = 仲良くする」ではなく、むしろ異なる考えをぶつけることから新たな価値や意味を生み出すプロセスが対話である。

この意見をぶつけることで新たな解釈が生まれるという経験を積んだことで、他者の意見に反対することは人格を否定することではなく、より豊かな価値を生み出すためのプロセスとし

て捉えるようになったのではないか、という意見が出された。「反対意見こそ大事」「違うことが面白い」といった発言が口々に出されるなど、対話型鑑賞で形成されたマインドの中にはメンバー共通のものがあると実感させられた。

#### 対話型鑑賞を分析的にみて考える大切さについて

メンバーの一人から、自分たちがかかっている対話型鑑賞を自分たちが分析的にみて考えることの大げさについて意見が出された。対話型鑑賞にもルールが存在しているが、そのルールが何のために存在するか理解した上で、全て鵜呑みにするのではなく常に新たな可能性を模索しなければならない。なぜなら、他者にみて考えることを促す人間がみて考えることを放棄するのは矛盾するということであった。一人ひとりの意見を尊重し、多様性を積み重ね、一つの正解がないところに様々な価値を生み出すことの素晴らしさを提唱する人間として常に自分たちの行動を批判的に捉え、常に自省することの重要性に気づく機会になった。

#### 対話型鑑賞の活用を考えることについて

メンバーの一人から「そもそもなぜ私たちは対話型鑑賞を活用しようと思っているのだろう?」という問いが投げかけられた。すると「一つのことからたくさんの発見ができるって楽しい」「一人ひとりを丁寧にみつめることは組織を良くするための近道である」「自分が過ごす時間をつまらない時間にするのはもったいない」「わからなかったものわかる瞬間って面白い」といった意見から、対話型鑑賞にかかわる動機の源は“どう生きるか”ということに通じていることが明らかになった。そして、あるメンバーからは対話型鑑賞を知っている人と知らない人の境の中で地道に少しずつ実践を積み重ねていきたいという意見が出た。対話型鑑賞を知っている人間の限られたコミュニティではなく、知らない人たちに知ってもらうことによって起こる変化をみたい、そしてその効果に大きな可能性を感じる、とのことであった。

アート作品の鑑賞プログラムだけでなく、今回のミーティングでも紹介されたように様々なシーンでそのエッセンスが活用できる対話型鑑賞、各人が多種多様な分野で実践することでどんなことが起きるのか、今後それぞれのフィールドでチャレンジした結果を共有すること、そして定期的な情報交換の場を開き続けることを確認し、初回のミーティングは終了した。